

シンポジウム「人間の安全保障と私たちの見た世界」

報告2「私の国際ボランティア体験」

国際学部国際関係学科3年 田淵 大輔

学生の立場で、紛争が起こった地域に行くということは非常に難しいことであり、今まで授業やゼミで学んでいた紛争地に実際に行けるとは、この活動を知る前には想像もできませんでした。今回は中村教授と生田助教授そして国際学部の皆様のご協力で実現したことを感謝しています。

クロアチアの難民キャンプやサラエボ、プリエドール、スレブレニツァの街中で銃痕のある建物を見るたびに、自分が紛争後の地にいるということを実感しました。そして何百もの遺体を目にし、被害者の話を聞き、戦争で傷ついた人々との時間を共有できたのは、貴重な体験でした。事前準備のひとつとして、現地児童施設支援のために、学内および茅ヶ崎駅前で募金活動を行いました。最初は声をだすのも恥ずかしいと感じましたが、最後には全員心をひとつにして全力で訴えることで、多くの方から支援を受ける事ができました。ご協力してくださった学生や、茅ヶ崎市民の皆様に、心からお礼を申し上げます。

今回の活動では、様々な出会いがありました。本や新聞を通してしか触れることができなかった国連職員の方々から直接現地事情や支援活動について聞き、外務省や大使館勤務の方々意見を聞くことができたのは貴重な経験でした。現地の人たちから見た日本に関する意見などは、教科書では知り得ない宝のような情報です。国際紛争、民族紛争を授業やゼミで学んでいる私ですが、現場に立って、関係者から生々しい話を伺えたことは何十冊の本にも勝るものとなりました。まさに百聞は一見にしかずという言葉がぴったりだと思います。

サンスキモーストで見た感覚が麻痺するくらいの数の戦争犠牲者の遺体、そのような光景を目にすることは、現在の日本では考えられません。もちろん見たからすぐに私たちの日常生活での行動や態度が変わるというわけではないのですが、その体験により、紛争の悲惨さの現実を実感できたと思います。人間は同じ人間同士でこんな悲惨な事ができる、人間だからこそできてしまうということを、私は今回の訪問を通じて改めて知りました。これまでボランティア活動には無縁の人生を送ってきた私ですが、文教大学の国際学部に入り、文教ボランティアズの代表を務めることによって、今まで想像もしなかった世界の現実に目を開かれました。私がここで話しているこの瞬間にも、人が人を殺しているという現実があります。その悲惨な現実を知る事で、私はこれからの人生の方向について、真剣に考えたいと思うようになりました。

私たちが募金活動で集めたお金や支援物資を現地に届けること、日本の文化紹介をして交流を深めることは、国際機関や国際NGOの活動に比べれば非常に小さな事かと思っています。実際に何ができたのだろうかという問いかけはありますが、現地の子供たち、人々の笑顔と接する中で、自分たちが逆に現地の方から、励ましを得、これからの人生を積極的に歩む事ができるようになったのではないかと思います。この経験を誇りにし、これからも国際協力とボランティア活動にかかわっていただけることを強く願います。